



2014年5月14日放送

頻用処方解説 四物湯②

大分大学医学部附属病院 漢方外来

織部内科クリニック 院長 織部 和宏

前回は四物湯を中心に、その派生処方ということで当帰飲子についてお話しさせていただきました。

四物湯は前回もお話ししましたように、当帰、川芎、芍薬、地黄といった4つの生薬からなっていて、血虚といって血に栄養と潤いがなくなった病態に使う方剤で、主として婦人科疾患にこの四物湯ベースが使用されています。

もちろん婦人科疾患以外にも、血虚タイプの人の高血圧によく使われるのが、大塚敬節先生(1900-1980)がお作りになった七物降下湯です。これは四物湯をベースに黄耆、黄柏、釣藤鈎といった成分を加味した内容からなっていますが、もう一つ四物湯ベースで有名な処方が、四物湯に黄連解毒湯を合方した温清飲です。

温清飲は、明の龔廷賢という方の『万病回春』(16-17世紀)という医学書に載せられている方剤です。江戸時代はこの『万病回春』が一世風靡したくらい漢方医のバイブル的な本になっています。その後、古典に返れということで、吉益東洞(1702-1773)などに代表される古方派、『傷寒論』『金匱要略』をベースにした医学というのが勃興してきたわけですが、そのような時代にあっても、この『万病回春』というのは大変読まれていた、あるいは勉強されていた本です。

その中に載っているのが温清飲で、先ほどご説明したように四物湯合黄連解毒湯です。『万病回春』の血が崩れる門と書いて血崩門、これは子宮出血等ですが、その薬方です。

その内容を見ますと、婦人の血崩、子宮出血がやや久しくて虚熱に属するもの、血虚になってくると相対的に自律神経のバランスが乱れて少し体が熱っぽくなってきます。感染

症などの細菌感染等の熱を実熱といいます。体の中の栄養分のバランスが崩れて相対的に熱が出てくるのを虚熱といいます。口が苦く、顔が火照る、手足が火照る、何となく胸がもやもやして落ち着かないといった虚熱症状が出てきたときに使われます。

ですから四物湯の補血剤、温めて栄養を補う作用と、黄連解毒湯これは黄蓮、黄伯、山梔子、黄芩といった4種の苦寒剤、色が黄色くて、味が苦くて、体を冷やす方向に働くといった黄連解毒湯を合方した内容ですので、対象となるのは、この四物湯と黄連解毒湯の両方の特徴を兼ね備えた証を治療するものということから、温それから清、温は四物湯、清は黄連解毒湯の働きを代表させて温清飲と呼んでいます。

この温清飲は、出ているところが血崩門ですから、婦人の子宮出血等のほかに、いろいろなところの出血に用いることができます。その他最もしばしば応用するのが、慢性に経過した頑固な皮膚疾患です。さて中国では陰陽とか寒熱、虚実という二元論ですが、日本人はその間に虚実中間といった概念を持ち込んだわけですが、この方剤はその虚実中間のようなタイプに用います。

当帰飲子は当然虚証です。黄連解毒湯はそういった意味では実証になります。当帰飲子では少し弱すぎる、もっと体力のある人に使うわけですが、そういったタイプの皮膚掻痒症とか慢性湿疹、尋常性乾癬、私はこの温清飲に桂枝茯苓丸加薏苡仁をよく合方して尋常性乾癬に使っていて、大変良く効いています。掌蹠膿疱症や蕁麻疹、特に注目されているのがベーチェット症候群にこの薬は結構効きます。ベーチェット症候群の場合は、口内の潰瘍とか、陰部潰瘍、結節性紅斑などが代表症状ですが、西洋医学とは違った角度でこの温清飲は使ってみると大変良く効いています。

具体的にどのようなタイプの人に使ったらいいかということですが、一つは皮膚の色が渋紙のように黄褐色で乾燥していることが多いです。この皮膚の色の性状を覚えめると、一目見ただけで、これは温清飲をベースにいろいろな方剤を組んだらいいというのが分ってきます。

この応用処方としては、森道伯先生（1867-1931）の一貫堂の柴胡清肝湯や竜胆瀉肝湯、荊芥連翹湯に繋がっていくわけです。そういった方剤を使う元にあるのがこの温清飲ですので、体質背景は特に、皮膚の性状などは、その温清飲の色がベースにあるということです。そして、解毒能が落ちてくるような病態、あるいはアレルギー性体質といわれているような方にしばしば使われています。

黄連解毒湯は黄蓮、黄芩、黄伯、山梔子の先ほどご説明した味が苦くて色が黄色で体を冷やす働きの生薬を組み合わせたものですので、その両者の性質を併せ持ったということで、日本人は典型的な黄連解毒湯タイプ、あるいは四物湯単独でいいというタイプは結構少なく、どちらかという、この中間タイプ（虚実中間）の温清飲の証が意外と多いです。

そこで、具体的に皮膚疾患に使う場合には、温清飲をベースにして荊芥、連翹とか、薏苡仁を加えていきます。方剤としては荊芥連翹湯で、体質改善には柴胡や甘草を入れるといいわけです。

『万病回春』の説では崩漏、子宮出血は新しいものも古いものも、いくつかありますが、これだという一つの処方では漢方はなくて、比較的元気のいいような大量出血の場合、あるいは出血量が少なくて長引くような場合などで使う薬が違ってきます。特に完全にやせ衰えて皮膚が乾燥してきて、じわじわ出血してくるといったときに使うのは、やはり四物湯ベースに芎帰膠艾湯、そういった方よりはまだ体力があるといったときに使うのがこの温清飲です。

この子宮出血以外に、いろいろなおりもの、種々の帯下にも使います。それがこの温清飲の特徴です。女性だけではなく、男性でも痔出血とか直腸からの出血とか、それが長引いて体がやや痩せてきて皮膚が乾燥してくるようなタイプ、そして何となく不安があって落ちつかないといったときに使うのが温清飲です。

ただし下血に関しては、大腸がんや直腸がんがあるので、この薬を使うということだけでなく、今の時代ですから、やはりしっかり検査をした方が良いでしょう。

温清飲は、神経疾患はもちろん自律神経の乱れが目立つ虚実中間の人に使うわけです。